太陽の側の島

チヅ殿

　元気でやっていますか、陽太朗ともども変わりないですか。こちらはとても暖かです。暑いくらいの日が続いております。そのせいかすっかり体は日に焼けて、黒く逞しくなったと我ながら思います。若干痩せたのではないかと周りからは心配されているものの、実際量ってみると出征の際の測定時よりも目方は格段に増えており、筋肉で締まったのだと自惚れながら思う次第です。なにぶん出征前は恐怖心に駆られ自ら掘った暗い壕の中で本ばかり読んでいた私ですから、お天道様の下、このぐらい働いていたほうが国のためにも体のためにもうんと良いように感じております。

　現在私はこの恵まれた気候の中、土地の開墾を主とした作業を任されております。現地の農夫は至って温和ではあるものの、いかにせん我が国の尺に当てはめると若干怠けすぎるところがあります。それでも作物が育つ気候の良さから今まで特段の問題はなかったのでしょう。我々はお国の負担のないよう自給できる分の食糧を得るため、そこかしこの荒れた土地を整えているのです。現地の農夫から食料を略奪することは厳禁であるから一刻も早く作物を、と焦る我々の気持ちとは裏腹に太陽も人々もずいぶんのんびりしたものです。ただ流石というべきか、奇妙なくらいによく降る天気雨により日に何本もの虹が見え、そうして耕したそばから、もう数日のうちに作物が芽吹いて元気に育つのを見ていると、こちらも鍬を持つ手に自然と力が入ります。そんな我々を現地の農夫は最初馬鹿にした様

子で見ておりましたが、次第に心配や感心の混ざった視線をおくって寄越すようになってきました。彼らは敵ではありません。彼らは確かに勤労の意識が大変に薄く共に戦おうという気概を一切感じることができませんが、わが国領土の農夫として我々が粛々たる勤労態度で手本となるべく生活してゆけば、きっと彼らも素晴らしい臣民となってゆくでしょう。

　とりとめなく書き連ねてしまいましたが、こちらはそんな具合で元気に頑張っております。そちらも暖かくなりつつある季節とはいえ朝晩はまだ冷えるでしょうから、風邪などひかぬよう気をつけてください。

真平

真平様

　お変わりありませんか。お元気でしょうか。何かご不都合、ご不足などございませんか。こちらは陽太朗ともども元気でおります。寒さも大分軽くなってまいりました。文面を拝見する限りお元気そうで何よりでございます。ただ、あの真平様の優しいお手で鍬を持ち炎天下で畑仕事をなされているのを思うと、胸が破れるように痛みます。

　それでも戦争の始まりには毎日毎夜沈痛な表情で「死」という言葉を口にしない日などなかった真平様の手紙から、以前のような悲しみの色が薄くなっているのを感じる、それだけが唯一、今の私の希望でございます。

こちらでは昨日、雲の厚い空から何枚もの刷り紙が降ってまいりました。雲のせいで飛行機がうっすらとしか見えない灰色の空から、ただ紙だけが降ってまいるのは雲が千切れて落ちてくるような、とても不思議な気持ちがいたしました。刷り紙を拾い上げて見ると、いくつかの都市の名前と、そのうち数箇所に新型の爆弾を落とすので記載の都市からお逃げなさいというような文章が書いてございました。その中には、私どもの住むこの町の名もあったのでございます。私は恐ろしくなってすぐに紙を道へ打ち捨て家へ走り戻りました。

走る家路で私は、一刻も早くこの町から遠いどこかへ陽太朗を抱えて逃げたいという気持ちでおりました。本当に申し訳ないことに、本家のお父様、お母様、近所の方々やお国のことより、私と陽太朗の無事だけが心にあったのでございます。たとえ私たち二人だけが生き延びてもどうにもならないだろうなど、普通に考えれば想像に易いことなのに。

私は家に戻り居間で一人昼寝をしていた陽太朗をかき抱きました。あの子は寝ぼけていたのかもしれません。私の背中に手を回し、私があの子に赤ちゃんの時分からもうずっとしていたように、私の背中を掌でぽんぽんと二回たたいたのでございます。まるであやすように。そして、私はそれによって恐ろしいほどにすとんと落ち着いたのでございます。

刷り紙に都市の名前は十と少しあったので、確実に空襲をされると決まったわけでもございませんが、もしこのように不安で一杯の状態で新型の爆弾が落ちたとしたら、私はこ

の家と陽太朗を守り通していけるのでございましょうか。
　申し訳ありません。暑い南の島でお国のため粉骨砕身なされている真平様に弱音を漏らしてしまいましたこと、とても恥ずかしく思います。どうか真平様も何卒、お体にお気を付けになってくださいませ。

チヅ

チヅ殿
　お元気ですか。そちらは変わりなくやっていますか。手紙を読み心配でいろいろ調べましたが官報などで見る限りまだそちらは無事のようですね。
　こちらは拍子抜けするほど恙（つつが）無く順調です。無論、毎日の訓練と荒地の開墾に精を出してはおりますが、空からの攻撃や海上戦の気配はいまだない状態です。時に敵連合国軍のものらしき飛行機が畑を耕す我々の頭上遠くに飛ぶのが見えすわ、と緊張が走るのですが何事もなかったように通り過ぎるきりです。気がついたのは、わが国と比べてここはずいぶんと雲が高い位置を流れているようです。見渡しがよいはずであるのに敵機が我々を見つけることができないのが不思議ではありますが、緬シャツ一枚で鍬を振るう日に焼けた我々を現地の農夫と見間違えているのかもしれません。これも機とばかり我々は食料の整備に精を出すのみであります。ただ不思議なことには遥か頭上を行く飛行機がいつもどういうわけか上下あべこべのように見え、敵国の戦闘機のつくりがそうであるの

か、また我々の知らぬ方法でひっくり返って飛ぶ戦法があるのかはよくわかりません。
　農作物は面白いように育ちます。硬く霜の降りる日本の畑と比べると魔法のようです。戦争が終わった暁にはこの場所で家族で暮らすというのも悪くないという気さえしてまいります。
　しかし島に入った日、それはもう酷い嵐でありました。我々の乗る食料運搬船はひどく揺れ、甲板に出て作業にあたるものは広い板張りデッキの上をあちらこちらとまろびつつ波に洗われておりました。男の太股くらいある綱が簡単に千切れ、先が暴れ大蛇のごとく波と共にうねっていました。その様を見て私は大変恥ずかしいことに、気を失ってしまったのです。船内の医務所に寝かされていたため非常に不名誉な気持ちで目を覚ましましたが、軍医の仰るには気絶でも私は知らずの内に揺れに任せ頭を強（したた）か打っていたらしいのです。どちらにしても恥ずかしい限りではあるのですが、私は気絶の理由を聞き少し安心いたしました。と申しますのも、あの時私が感じたのは恐怖といった個人的な心持ちではなくこの世の中や大自然への本能的な驚異であった、と頭の瘤が証明してくれているような気がしたのです。
　着いた島に桟橋らしきものはなく、そのためかえって大きな艦隊は接岸しないことが好都合であろうと判断がおりました。嵐の余韻によって霧が濃く、先にボート隊が浜に向かい暫くした後、靄の中を割って幾つかのカヌーが艦に向かってまいりました。先陣隊の方々

と共に現地の人間が我々や荷物を浜まで積んで運ぶ時の、白い靄の中進む様は大変幻想的で、私のまだチカチカと痛む脳には銀色の映画に見えました。じっとり暑いなか素朴ではありますが美しい味わいのある飾り彫りがされたカヌー、水面近くを泳ぐ原色の魚は愈々（いよいよ）我々に遠い南洋の地で決戦を迎えるのだと言う気持ちを奮い立たせました。家ではあれだけ怖がっていた自分が嘘のように思えました。

長々書きましたが、こちらはこのような感じでおります。そちらもくれぐれも気をつけるよう。

真平

真平様

そちらはずっとお暑うございましょう。

結局を申せば、あの刷り紙が降った後もこの町に爆弾は落ちませんでした。候補に挙がっていた都市の幾つかに多少の空襲があったと聞いてはおりますが、それも新型の爆弾というわけではなさそうです。きちんと手に取って読んでいなかったことが悔やまれますが、空襲の期間に関する具体的な記載はなかったように記憶しておりますゆえ、今夜おこるか、明日には来るかと毎日生きた心地せず暮らしております。その間にも町の方々や、店員さんから人づてでさまざまなことを伺うにつけ心の弱い私は一層恐怖が募ってしまうのです。一時は刷り紙とともに空から毒の霧を撒かれていただとか、時間が経つと溶けて消える特

別な紙でできているだとか、刷り紙を拾って手にしたものは手から毒がしみて腐るだとかいう噂も流れていました。私はそれを聞いたときはもう怖くて、いつまでも手を桶の水につけて過ごしておりました。これほど恐怖に思うなら刷り紙など手に取らねば良かった、読まねば良かった、人づての噂など耳にせねば良かったなどと己の気持ちの弱さをひたすら悔いるのでございます。

真平様のお手紙を呼んで聞かせて以来、陽太朗が虹を見たいと申すものですから先日は庭に出て角度を見ながら水を打ち、小さな虹をこさえてやると大喜びに喜んで、以来昼間の庭の水打ちを進んで行うようになりました。きっかけはどうあれあの小さかった陽太朗がお手伝いなどするようになったことに胸の熱くなる思いがいたします。戦争が落ち着きました暁には、ぜひ一緒に、南の島でも北の海でも、どこにだって参りましょう。沢山の虹を眺めましょう。陽太朗を飛行機やお船に乗せ、どこまでも敷かれた線路をすべるような機関車で、ずっと遠くの色んな場所を眺めに参りましょう。それまでどうか、どうかお元気で。

チヅ

チヅ殿

お久しぶりです。お変わりありませんか。戦局の長期化に向けて我々の隊も愈々本格的な訓練をと、今までにも増した開墾整備を行っております。

このところ、島は昔より伝わる祭りの準備があり、普段は過ぎるほどのんびりとした島の人間もどこかそわそわと落ち着かない様子でおります。

今日は島の人間が祭りに使う「茶」の準備をしておりました。といっても我々の飲む茶とはまず原料から違うようです。漢方の煎じ薬、と言ったほうがわかりやすいでしょう。ただ飲むものではなく掛けるものなので、仏様の甘茶にも通じるように思われます。祈禱師や僧侶に当たる人間が、祭りの年の気温や湿度その他要素を鑑みてその年に使う茶の配合を決めて草を集め、物によっては乾かしたり腐らせたり、粉にしたりなど加工して煮溶かし、とろりと茶色く透きとおった液体をこしらえます。配合された植物の中には生き物に猛毒な成分も含まれているらしく、飲むことはおろか皮膚に触れるだけでも暫く痛みが取れないそうです。

これを何に掛けるのかというと文字通り「ほとけさま」に掛けるのです。村から離れた社の裏に生える大樹には、普段住民はおろか私たちや村の政治を取り仕切る年寄りも近づかないのですが、祭りの準備のために茶を桶へ入れ、担いで木の根元に運ぶのです。私は好奇心もあったので、ついて行って木を見ることができました。どうやらこちらあたりの葬式は専ら風葬のようで、独特の方法が取られているらしいのです。老いも若きも、男や女また小さな子供の亡き骸までもが島を見渡せる大樹の枝に座らされておりました。桶を担ぐ島の人間は普段ほとんど裸であるのに、この時は頭に頭巾、長い襦袢といった暑苦し

いいでたちで、ささらに割った竹の棒を茶に浸け、木の枝に座らされた亡き骸へ浴びせるようにして振り回すのです。亡き骸は、体より発せられる分泌物と茶の化学変化により防腐ならびに虫や鳥に食われることが無いばかりか、肌の張りや髪の艶もいつまでも変わることなく、裸で木の枝にそろって座り眠っているように見えるのです。

祭りの当日は陽の暮れかかるころから木の下に島の人々が集まり、酒を飲み歌い踊ります。日がすっかり沈んだ頃になると若い男たちが木の上へ登り腰かけさせていた亡き骸を降ろしてまいります。それから用意していた「茶」で一体一体丁寧に拭き清めてから手足を棒と縄でくくり生きた人と死んでいる人とが繋がり輪になって踊ります。生きている人の巧いことをした動きに合わせて操り人形のように手足の動く亡き骸は、月明かりの中ではまるで本当にいっしょに踊っているように見えるのです。我々も呼ばれて杯をいただき聖なる木の下でそれは幻想的な夜を楽しみました。驚くのは普段は呑気で怠け者にも感じる島の人々が、この夜は全員が祈禱師であり僧侶であるかのような、厳かでかつ穏やかな雰囲気をもち、最初は村の祭りと高を括っていた我々もすっかり居住まいを正して彼らの崇高な精神性に大変な感動をしたのでありました。

そちらもご無事で何よりですが、心配しているのは体力よりも気持ちの問題です。あなたは大変な働き者のうえ頑張り屋ではありますがどうにも細かく気にしたり、色々と無理をしてしまうところがあります。私はそんなあなたの気遣いにいつでも救われておりまし

たが、どうかこんな時ですから細かいことをくよくよせず、気を大きく持ってくださいませ。陽太朗も日に日に逞しく育っているとのこと、嬉しい限りです。頼れるところはどんどん陽太朗に頼り、どうか無理しすぎることのないように。

真平

真平様

私は今日、このことをお伝えしたほうがいいのかどうか、大変迷っております。

戦局が長引いて皆の心も少しずつ、綻びができてきているのかもしれません。私のほうも真平様と一緒であったあの時のような希望が少しずつ薄れてきてしまっているのかもしれません。いけないことだ、恥ずかしくないようきちんと生きていかなくてはと頭では思っているのです。町の人々も皆支えあい譲りあっておりますがどこか冷え冷えとして張り詰めた緊張感と隣りあわせでいるような、いつ誰かが不安を爆発させてしまったならという、白々しい恐ろしさがすぐそばまで差し迫っているような毎日でございます。

昨日のこと、私はお昼ご飯の準備に井戸に向かうのに役場の裏手のほうの細い道から近道にして抜けておりました。真平様にはあまり一人で歩くなといわれておりましたあの裏道でございます。申し訳ないことですが、最近はずっとこの一番近い道を使っております。暗くなる前に家の仕事を済ませてしまいたいという思いと、広い道ではいつ飛行機から見つけられてしまうかと思うと怖くてならないというのが大きな理由でございます。頭の上

からなんの準備もなしに撃たれ、何が起こったのかわからぬまま地べたに死ぬくらいであれば、目の前の暴漢に殴られ物を奪われるほうがよっぽど恐怖の準備ができるというものです。

そうして井戸で水を汲んでから再び戻るとき役場の裏手、破れた柵を越え空き地を抜け橋を潜った所で、私を見つめる二つの光るものに気づいてしまったのでございます。本当はもう暗くなりかけていたのですぐにでも家へ帰りたかったのですが、その光るものにどうしても吸い寄せられてしまった私は、光の元である低い藪のほうへ近づいてみたのです。はたしてそこには、一人の兵隊さんがいらっしゃいました。兵隊さん、といっても軍服の形も色も、我が国のものではなさそうです。髪の色や目の色、顔の形もその時は暗くてよく見えませんでしたが、あまりにも私たちの見た目とは違っておりましたため、直感で私は敵国の兵士であると感じ取りました。とっさに抱えた桶で身構えたのですが、目が慣れるにつれて兵隊さんは怪我か何かでひどく弱っているらしいということ、さらには兵隊さんの背格好がどう見ても私たちでいうところの小さな子供、蹲っているようでしたが陽太朗よりは若干大きい程度の背丈だというのが理解できました。息も荒く小刻みで、おそらくどこかから逃げてきて隠れているのかと思われました。こうやって暗がりの藪に逃げ込んでいるというからには、見つかればそれなりの酷い目に遭わされるということなのでしょう。私は近づいて、彼の肩に触れました。食事を満足に取れていない私たちでも、か

ようになっているものはおらぬといったほどに細い頼りない肩は、驚くほどに熱を持って、おそらく軍隊の制服であろうと思われる丈夫な布越しにも汗をたんと吸って湿っているのがわかるほどでした。
　私は何を思ったのかそのときのことはもう夢中で記憶も朧なのですが、とりあえず少年を背負い人目につかないよう注意深く家の庭まで連れて来たのでございます。背負って歩きながら、私は一つも後悔などしておりませんでした。陽太朗とさほど変わらないであろうこの兵隊さんらしき少年、それがたとえ敵国の人間であっても一つの命に変わりはございません。
　自分の命さえも危ないというのに、という考えも胸の内をよぎりましたが、むしろだからこそ、自分の生きる間に少しでも多くの命を守ることが私の使命であるかのような気持ちでおりました。それは生への執着のようでいて、全く逆のものであると私は思うのです。先だって、農家の方が配給とは別にお野菜を皆さんにお裾わけしていらっしゃっていたのですが、それを皆で生きていこう、生きて平和な世になるまで助け合おうという気持ちであるのか、あの世に持って行ける財産も食べ物も無いのだからといった諦念と取るか紙一重なのではないでしょうか。その時と今の私の思いは似ているものかもしれません。背負っている間に小さな兵隊さんは、喘ぎながら一言つぶやきました。おそらく、私の知らない国の言葉であるようでした。

庭の庇の下、あなたもご存知の、もう使っていない大桶の中に兵隊さんを隠すように凭せ掛けて筵を上に張り、私は家の中を覗きました。土間では陽太朗が火を起こしている最中で、私のほうに背中を向けしゃがみこんで、竈の火種を懸命に育てていました。声をかけると、煤で鼻の頭を黒くした陽太朗が笑顔でこちらを振り向きました。陽太朗はもう私の仕事のいろんなことを、私が言わずとも手伝ってくれております。本当にありがたいことです。この子が生まれたときの、この子の面倒をずっと見ていくという私の決意にはいまだ一点の曇りもございませんが、当時はまさかこの子がここまでしっかりと育つとは思っておりませんでした。体が弱く学校に行くことも叶わない陽太朗が風呂を焚き、台所の手伝いをしてくれているのです。あるいはこの戦局でなかったら、私は彼を守りに守って何もさせずにいたのかもしれず、この厳しい生活は陽太朗と私の体や心も磨き上げてくれているような、そんな気が致したのでございます。

　私の真剣な顔に疑問を持った風の陽太朗に向かって、私は何も言わずに力の限り微笑み（といいましても、そのときの表情はおそらく大変に不自然なものであったことでしょう）、肩を抱いて庭先まで連れて行くと、筵を取って桶に隠した小さな兵隊さんを見せたのです。陽太朗は驚きこそすれ、恐怖よりも彼の体の大変なことに心配をしている様子でありました。私は陽太朗さえ怯えなければ大丈夫という確信を抱いたものですから、桶から彼を抱き上げると、物置にしております二階の座敷に担いで上げました。以前お母様がお使いに

なっていた布団を敷いて、破れて泥まみれの制服を脱がし、陽太朗の浴衣を羽織らせて横にしました。私が体を拭き、陽太朗は水とお湯を沸かしたものを洗面器に取って来てくれ、目に付いた傷の手当てをしてやりますと、小さな兵隊さんはずいぶん楽になった様子でスウスウと寝息を立てはじめました。改めて全身を見てみるとやはり奇妙というか、大人のような顔立ちでありますのに、そのまま尺が縮んでいるような格好で、ごくたまに発する言葉などから考えてもやはり敵国、そうでなくともどこかよその国の人なのではないかと思われました。彼の寝顔を見てから私は少しだけ平静を取り戻して、そうして横を見ると陽太朗も私の顔を見て暫くしてからしっかりとした様子で頷きました。この子にはあまり難しいことはわからないでしょう。ただ彼のことは私たちだけの秘密ですよ、誰にも話してはいけませんよと言いきかせると、いつもは何故ナゼの攻撃にあうところを「はいお母様」とだけ言ったのです。そうして二人の大切な秘密ができました。

　あなたの心配を解くために申しますが、まず第一に、この小さな兵隊さんは武器を持っておらず、また、体がとても弱っております。そうして次に、とても小さいのです。先ほど陽太朗の少し年上くらいの子供のよう、と申しましたが、体格でいうと陽太朗のほうがまだ肉付きは良いであろうと思われる、大変華奢な体つきをしております。暫くまともな食事をしていないようにも見えます。もう一つ最後に、これは私が真平様へ誓う約束事になりますが、この小さな兵隊様の調子が少しでも良くなったら、私はまた同じ場所に彼を

置いてこようと思っております。もし街中の騒ぎが大きくなるなどのことが起こりましたら、すぐに役場にお伝えしようと思っております。それまで、数日の間だけでも命を繋いであげようと考えるのは、たとえ危険であろうとも私たち母子のせめてもの我儘と思い、お許し頂けないでしょうか。

戦局長引くこの大変な折に真平様にさらなる心労を抱かせてしまいますこと、お詫び申し上げます。真平様も何卒、ご無理なきよう。

チヅ

チヅ殿

お変わりないでしょうか。ご無事でいらっしゃいますか。

先だってのお手紙につきましてはこちらも心配しております。道端の草や虫にも気持ちをかける優しいあなたと、その心を継いだ陽太朗が人の命を守るのは大変自然なことであり、もちろん私も誇りに思っておりますが、何より気にかかるのは町内の人たちとの係わりです。あなた方に限らずこの時勢に人はなかなか一人で生きられるものではありません。なんと申したらいいのか難しいところですが、色々な物を守ろうとしすぎるあまり心が破裂してしまわないように、ただそれだけを祈るものであります。

こちらは後の祭りとはよく言ったもので、どこか気の抜けたような、不思議な高揚感に浸ったまま毎日を送っております。といいましても実のところ、祭りは完全に終わったわ

けではなく、日本の盆がちょうど迎え火と送り火があるのと同じでもう一度あのような宴を行って祭りの終わりとするのだそうです。最後の宴のときに再び木の枝に座らせるまではそれぞれの家族が亡き骸を家に持ち帰り、「茶」の風呂で沐浴させる以外は家族の一人として普通に食卓にも同席させて生活をするとのことです。島の中でも大きな家ともなると相当な人数の亡き骸がいます。また、何かの理由があって家族のいないものなどは、島のあちこちにある葺き屋根のついた簡易な祠で休まされています。朝夕に当番で島の人間が「茶」を掛けて拭き清め、食べ物を供える様子は日本の地蔵様とあまり変わりがありませんが、道端のあちこち、屋根の下に座っている亡き骸を見ていると、死んだものをなるべく隠そうとする日本の文化とは大層な違いがあり、困惑するものであります。もっとも、「茶」の効用により腐りもせず虫や鳥にも喰われない亡き骸は、私たちの目から見ると肌の色こそ若干濃いものの(とはいえ島の人間は皆よく日焼けしておりますゆえ、似たり寄ったりなのですが)、ただ雨宿りやうたた寝でもしているかのように思われるのであります。私が畑仕事に通る道に座っている亡き骸などは、鼻が大きく欠けております。生きているうちに大きな怪我をしたのか、はたまた「茶」を掛けるのを鼻だけ忘れられてしまって、鳥や虫についばまれてしまったのかはよくわかりません。

私はといえば、相も変わらず畑仕事の日々でございます。変化といえば毎日面白いように育つ作物ばかりで、それも成長が順調であるという意味では「変化なし」とみなすこと

もできるもので、空を上下あべこべに飛び続ける敵機に脅えることもなく鍬を振り上げ土を起こし続けており、こんな状態で、いったい国のお役に立っているのであろうかと不安に駆られる日々でございます。このように無事な私ですら不安になる状況なのですから、あなたと陽太朗の心の振るえは察するに余りあります。こちらから何もしてあげることができないのが歯がゆいです。あなたは何も間違ったこと、恥ずかしいことなどしていないのですから、自分がお辛くなったらすぐに役場やお隣へ駆け込んで助けを求めるように。

真平

真平様

先だってはあのように取り乱したお手紙をお送りしてしまいまして、申し訳ございませんでした。あの後すぐに差出を取り消してしまいたいような、恥ずかしい気持ちで過ごしておりましたところ、真平様からかような思いやりに溢れましたお返事を頂きまして、なおのこと申し訳ない気持ちでおります。

件の小さな兵隊様は、簡単に片付けました二階の北側にある物置に休んでおります。あそこは窓もなく光こそ漏れませんが、昼間部屋との扉を少しばかり開けておくとサラリとした風が入るために湿気の心配も無く、あなたが特に大切な本を仕舞っていらっしゃったところでございますので、病人にも調子がいいのではないかと思われたのでございます。

本はどうにかして巧く纏めてきちんとその部屋の手前に納めてございますのでご安心を。彼はまだ体を起こすのが難しいとはいえ私の作る芋湯を飲み若干顔色に血気が差してきたように思われます。相変わらず言葉がよくわからないのですが、同じく言葉のいくぶん不自由な陽太朗と通じるところがあるらしく、たまに私が外の用事から帰ると何やらクスクスと笑いあったりなどしています。疎開拒否にあい友達とも離れてしまった陽太朗にとっては、姿かたちや言葉こそ違えど、同じ子ども同士の、久々の交流が嬉しいのかもしれません。そして、怪我をしているということを差し引きましても、彼の怯えも敵意も感じられない眼差しを見ていると、やはりこの子は何か私たちに危害を加えることなど無いような安心した気持ちになってまいるのでございます。彼は自分のことを「ニヤ」又は「ニヤ」というような言葉で名乗りましたものですから、私は「荷屋」や「尼家」などのことかと思っておりましたがどうやらそもそも我が国の言葉ではないようです。ただ名前に言葉の違いがあるわけではないという気もいたしましたし、何よりも聞いた陽太朗は以来彼のことを嬉しそうに「兄ぃや」と呼ぶようになりました。そう聞くとなるほど、陽太朗より少しばかり年嵩に見える彼は、陽太朗とは少しふわりとした雰囲気も似ていて、なんとなく兄弟というのも不自然ではないような気がして見え、私などもなんとなしに「兄ぃやさん」などと呼んでしまうのであります。

もちろん、彼の体がもう少し良くなって立ち歩けるようになりましたら、きっと彼を見

つけたあの叢（くさむら）の辺りまで連れて行ってお別れをするつもりであります。それまでは、私も陽太朗も一切身近な人間にもこの秘密を漏らすまいと考えております。ですから、この間は私も取り乱してしまってはおりましたがもう大丈夫でございますからどうかご心配いただきませんよう、真平様もどうかご無事でお過ごしくださいませ。　チヅ

真平様

如何なされておりますでしょうか。兄ぃやもここのところは自分で体を起こし、さすがに立ち歩くことはまだ難しいようでございますが少しずつ快方へ向かっております。表に出さないように、障子や灯り取りの傍に立つなど人の目に触れることのないようにと陽太朗にも強く言って聞かしておりますし、兄ぃや自身も言葉がわからずともなんとなく分別がついているのでしょう、物分かりの良いところや落ち着いた佇まいを見ておりますと、やはり兄ぃやは子供ではなくどこか小さな国の大人の兵隊さんでは無いかという気にもなってまいるのです。伝えることが難しいとわかったためか口数は一時よりもずいぶんと少なくなり、その代わりによく私と陽太朗の会話をじいっと聞いております。陽太朗と二人のときは、部屋の端に仕舞われたあなたの本の中から植物百科などを取り出して、順番に指さしながら何やらお花の名前を囁き合っているのです。

近頃私はどうしたら良いかわからず悩んでおります。時期がくれば必ずお別れが来るよ

と陽太朗には最初から何度も言って聞かせておりますし、私自身の心ももう決まって、できれば早くその日が来ればとさえ思っておりました。しかし陽太朗はいっそう兄ぃや、兄ぃやと懐くばかりですし、兄ぃやのほうでも私たちの言葉を理解し、私と陽太朗二人の生活に寄り添おうとしてくれているように感じられる様子を目にするにつけ、心のどこかではこのまま、兄ぃやの体が完全に治らないままこの国の戦いが終わって町に出ても誰一人私たち三人を後ろめたい気持ちで見つめたり、棒で叩かれることのない世の中にある日突然なってしまえば良いのにという気持ちでおります。

昨日の午後にもまた、飛行機で刷り紙がばら撒かれたようでございます。以前より皆どこかキリキリした様子で、刷り紙を細切れに破り踏みにじるものもおりました。

真平様はお忙しいのでしょうか。一行でもお手紙を欲するような我儘があってはならないという気持ちと同時に、真平様のご無事を知る唯一の手段であるお手紙が途絶えることに言い知れぬ不安を抱えてしまうのでございます。

どうか、ご無理なきよう。

チヅ

チヅ殿

お返事が遅くなってしまい申し訳ありません。ただこちらで起こりましたとても不可思議なできごとをどうご報告したら良いものかと悩んでおりましたため、ご容赦いただけれ

ばありがたいと思うものです。

ひょっとすると私の書いたこの手紙を読んだあなたは、遠い南の島で暑さに魘（うな）され厳しい訓練や野良仕事で気がふれたのではないかと思うかもしれません。否、実際そうであるのかもしれません。狂人は自分のことを狂人だと認めないものです。私も本当は頭のどこかがおかしくなっていて、こんな荒唐無稽な幻を実際に起こったことのように感じているだけかもしれません。

この間のお手紙で、奇妙な祭りのことをお伝えしたかと思います。樹上に座らせて葬っていた亡き骸を木から降ろして一緒に輪になって踊り、しばらくの間地上で生きた人間と同じ暮らしをさせるというものだったのですが、日本の送り火に当たる日、暫く共に暮らした亡き骸を樹上に再び座らせるための踊りが行われるのです。最初のときと同じように、生きてるものと死んでいるものとを木の棒で繋ぎ輪になって踊ります。これも夜通しです。暗い夜、火を囲んで踊るのを眺めていると、皮膚の色も何もわからず、全てがごちゃ混ぜとなって、まるで誰が生きていて死んでいるのかわからなくなります。そうしてずっとずっと踊って、踊って、白々と夜が明けます。その時の私の疲れた目で見て、酔った頭で感じたものは、今となってみても錯覚か何かだったのではないかと思うのでございます。踊りの終わりの太鼓が鳴って、ゆっくり足踏みが止まった瞬間の私の驚きをどうお伝えしたらいいのでしょう。手かせ足かせをはずした瞬間のくったりとなった亡き骸を軽々と抱えあ

げたのは、鼻の欠けた男だったのです。男はひょいと肩にそれを担ぎ、すたすたと歩いて木の根本に立つと、開いているほうの手で幹の瘤をさぐりさぐり上っていったのです。そうしてなんとも手際よく亡き骸を座らせると、木の枝を飛んで降りて来ました。

　近くにいた島の少女の言うには、最後の夜に死人と生きたものが輪になって、何周もぐるぐる回りながら一晩中踊ることで、どれが死人だか生きているのだかわからなくなった人たちは、生き死にがごっちゃになってしまうのだそうです。そんなばかな、と最初は思いました。島の強い酒で悪酔いして幻覚を見たのだろうと思いました。ただ次の日から、確かに農夫の家には鼻の欠けた男が暮らすのです。妻も元の農夫の妻であるのに、鼻の欠けた男とともに暮らすということです。よくよく考えてみるとそういえば、この島に来てから子供が生まれるのを滅多に聞きません。お腹の大きな女の人もついぞ見かけません。ひょっとしたら子供は子供のまま、青年は青年のまま、娘は娘のまま、老人は老人のまま「交代」しているのかもしれません。私が相当、腑に落ちない顔でいたのでしょう、島の少女は少し吃驚（びっくり）したように、それでも笑顔で、

「兵隊様の国は『外側』を一回使ったきりで捨ててしまうのですか。もったいない」

　というような意味の島の言葉を発して、水を浴びに行ってしまいました。

　ひょっとしたら私たちの隊は、集団で狐にでもつままれているのかもしれません。島の酒、よく育つ作物、いくつも見える虹といった物に催眠作用でもあるのでしょうか。いや、

むしろそれらがすべて催眠によって見ている幻なのかもしれません。私はいよいよ、沢山のことがわからなくなりました。

ただ、私は毎日生きて、畑を耕しております。それだけは事実であるのです。手にはいくつかの肉刺と痛みがあります。日に焼けた体には筋肉の瘤があります。

変なことを書いてよこして、と思われるかもしれません。ふざけて騙そうとして、と思われるかもしれません。

元気で、早くまた三人で過ごしましょう。

真平

真平様

便りが無いのはなんとやら、とは申しましてもやはり梨のつぶては心配で、毎日生きた心地せず暮らしておりました。

いいえ、真平様が嘘だとか騙すなど露ほども思っておりませんとも。私は最近思うのでございます。こんな大変な世の中で、私たちが生きていることすら奇妙に思えるほどの困難の中で、どんなできごとが起こっても、そんなもの不思議のうちになど入らないのではございませんでしょうか。

私が最近、そう思うようになったことが、こちらでも起こりました。真平様があのようなお手紙を送ってよこしさえしなければ、私も自分の気が違ったかと考えて、お手紙に書

くこともままならなかったかと思います。
　空にビラが撒かれても、もう誰も怖がりません。皆は気を張り続け、誰かを見張ったりし続けたことによる疲れで、なんだか逆に、すっかり穏やかな気持ちになっているのでございます。ですから陽太朗が私に、
「兄ぃやと一緒にぼた山に行きたい」
　と言ったとき、私は反対しませんでした。きっと今のような状態で、少しばかり様子の違う子供が二人、仲よさそうに歩いていたとして一体誰がそれを咎めるでしょうか。
　それに気になりますのが、陽太朗は最近、兄ぃやが縮んでいるといって泣くのでございます。私もうすうす気づいておりましたが、兄ぃやは最近少しずつ、なんと申しましょうか、痩せているのではなく体の肉付きはそのままに小さくなってきているのです。大きさに関して以外は、元気になっているように見えます。床の上に座り本を眺めたり、部屋の中でいろいろ動いたりしています。ご飯も食べております。それでも、私と陽太朗の気のせいかもしれませんが兄ぃやは日ごとに小さくなっているように見え、それを心配して陽太朗は夜ごとべそをかくのでございます。
　陽太朗の気が晴れたら良いだろうという思いと、やはり兄ぃやはもう長くはないのかという不安もあり、この部屋にずっといても仕方がないという気持ちで、私は二人にお山へ行こうと言いました。朝、二人には枕を打ち直してこしらえた頭巾をかぶせ、私のほうは

手ぬぐいで軽く頭を纏めて覆い、お芋と粉で練ってふかしたお饅頭をいくつか包みまして、一緒に裏のぼた山へ向かいました。陽太朗は大層喜んで、兄ぃやの手をひいて歩いていくのです。最初は久しぶりの外出に目を眩しくしたり、こわごわと足を踏み出していた兄ぃやも、陽太朗の手をとり歩きだしました。良い天気でした。私たち人間が死ぬ死なぬに拘わらず、緑はとても美しく、空気はとてもおいしいものです。私たちが下ばかり見て、暗い部屋にいる間にこの国は気持ちの良い初夏となっていたのです。お天道様は平和なところにもそうでないところにも等しく照るという至極当然の、陽太朗にもわかるようなことを私はいまさら、思い知ったのでございます。ぼた山までの道すがら、私たちはずっと笑っておりました。兄ぃやも途中くたびれたときは少し私がおぶりましたが、それでもずっとにこにこしておりました（思えばこの時、あの子は驚くほど軽かったのでございます）。

頂上で広がる景色を見ながら陽太朗が、

「お母さま、あの大きな楡の木に登りたいです。兄ぃやと！」

と、お饅頭で頬ぺたを一杯にふくらかしながら申しました。覚えていらっしゃいますか。あなたがよくぼた山の本当のてっぺんはここだよと言って、まだ小さな陽太朗を抱えて登っていらしたあの木でございます。陽太朗曰く兄ぃやが楡の木をじいっと見ていてそれでなんだか胸がさわさわしたと。

私は少し心配をいたしましたが、陽太朗にそのような、他者を思う気持ちの芽生えたの

が嬉しくもあり、今させてあげられることはなるたけという思いで私が手を貸しながら陽太朗と兄ぃやは少しずつ太い楡の木を登ってゆきました。そして丁度良い具合に太い木の又に二人で腰を掛けて懐からお饅頭の残りを取り出すときゃっきゃとはしゃぎながら仲よさそうに食べ始めたのです。私も幸せな気持ちでいっぱいになって、木の根の瘤に座って休みました。しばらくして、

「虹です。お母様」

という嬌声が聞こえました。私が座ったまま上を見上げると、葉の茂る枝の根本から陽太朗の腕だけがにょっきりと伸びて、遠くを指さしているのが見えました。指の先を辿ってみると、私たちの住む町のもっとずうっと先のほう、見事な丸虹が架かっていたのです。丸い二重の虹。うっとりと見ていると、暫くして虹の真ん中から最初はぼんやり、そうして少しずつはっきりとした橙色の火柱が見えてまいったのでございます。それから少し遅れて、耳の裂けるようなドンの音。音が、遠くから大きな波のように麓の町を撫でてぼた山の斜面をせり登ってまいるのが見えました。山頂に届いた瞬間、私の全身、纏めていた髪の毛の端まで震え上がり背を凭せていた幹に響き山に在る全ての葉っぱがギュワッギュワッと騒ぎました。二人とも降りていらっしゃい早く、と叫ぶ声も自分は出せていたかわかりません。幹を叩いて必死に口をあけて空気を肺から押し出しました。あんなに遠い場所の空襲の光なのに、頬が焼けるように熱かったのが余計に恐ろしく感じました。ドンの

余韻の耳鳴りがようやく収まりかけ、代わりに火のついたように泣き叫ぶ陽太朗の声が聞こえてきました。
「お母様、兄ぃやが」
私は夢中で木によじ登りました。木の又には陽太朗が一人きりで座っておりました。
「兄ぃやが、干からびてしまいました」
陽太朗の腕には今朝兄ぃやに着せた着物に包まれた木の枝が抱えられておりました。泣く陽太朗を抱えて降り、山道を戻りました。生きた心地などしませんでした。誰一人、道を歩いておりませんでした。爆弾はずっと遠くに落ちたようだったのにあの音と熱さです。私たちの町もすぐあれに呑まれてしまうだろうという気持ちがしたのです。あのビラの裏に書かれた「新型爆弾」の文字をいまさら思い出し、嗚咽のやまない陽太朗をおぶりながら走りました。響くような音はいまだ鳴り止まず空を支配していて、火こそ届いておりませんが、町の温度も確実に上がっておりました。吸う空気の熱さで喉がじりじり焼けるような気持ちがしました。無事家に着きあなたにこしらえていただいた地下の壕へ入った途端、からだの力が抜け私は陽太朗を抱きしめたまま汗びっしょりで気を失うように眠ってしまったのでございます。夢も見ませんでした。お腹も減りませんでした。陽太朗はずっと、「兄ぃやが」とすすり泣き続けておりました。
目が覚めて壕の蓋を開けると、眩しいほどの青空に雲雀が飛んでおりました。外に出る

とあの熱く重い空気は一転、澄んだ気持ちの良いものに変わっておりました。洗濯物もすっかり乾き、塵ひとつついておりません。道を見ると忙しそうに水打ちをしている人やお使いをしながら立ち話をしている人もおります。あまりに普段どおりの生活のために、私は寝ぼけていたのではないかとさえ思ったのでございます。ただひとつ、兄ぃやがいなくなったことだけが、変わったことでありました。私たちは庭に陽太朗の抱えていた着物を埋めて、木の枝を刺してお墓にいたしました。

　木の上に座ったまま、音と風を浴びた瞬間に干からび、木の枝になってしまった兄ぃやのことは、おそらくこのお手紙以外の誰にもお話しすることはないでしょう。

　南の島もどんどん暑くなってまいりましょう。どうか、お気をつけて。

チヅ

チヅ殿

　ご無事とのこと、私がこしらえた壕も役に立っているようで何よりです。もっとも、役に立つようなことなどないほうが良いに決まっておりますが。

　あなたからの手紙を読んでから、兄ぃやのことを思いました。こちらの人々は制服を持ちませんし、兵役についているものもおりません。さらには写真さえ見ていないというのに私は、兄ぃやがこの島からそちらに行ったのかもしれないと考えております。

　ここは戦争だけでなく、見ていると喧嘩らしきものが一切ないのです。なにぶん体を繰

り返し利用する方法を知っている人々ですから、不慮のできごとで怪我をしない限り、滅多なことでは体を傷付けないのでしょう。矢鱈と働かないのもそういったことが原因かもわかりません。島の人たちは「こういう方法」をあるときから知って、それ故に「外側」を大事にして傷付け合わず生きているのだと思われます。それでもあの、鼻の欠けた男のように、不慮の事故は起こります。火事や高いところから落ちる、または波に呑まれ溺れる（実際島の人の事故死は溺死が殆どであります）場合に、体が焦げたりばらばらになったり溶けたりすると祈禱師でも茶でもどうにもならず、その時にだけ島の女が子供を生むということです。

私は話を聞いているうちに、この方法を覚えぜひ日本に持ち帰りたいと思いました。命の終わりを怖がらなくなるからという理由だけでなく、この方法があれば人はもっと平和に生きることができる気がしたのです。敵機は相変わらず、この島など存在しないかのように頭上を気持ちよく飛んで行きます。

爆弾ももちろんですが、雨の多いこの頃、梅雨の湿気にてお体壊しませんよう、陽太朗ともども大事にするように。

真平

真平様

お元気でいらっしゃいましょうか。

　私はこのところのできごとを、最初からまるで夢の中のことのように思っておりましたが、陽太朗のほうはよほど兄ぃやのことが悲しかったのでしょう。あれこれ手伝ってはくれていますが、ふと気づきますすと件の図鑑など眺めているのでございます。

　私は陽太朗のそばに座り、図鑑をのぞき込んで驚きました。図鑑の一頁毎に庭先の葉っぱや細かなお花が押し花になっているのでございます。そうして何かしら小さな文字のようなものが一杯に書き込まれていました。真平様が書かれたものでないことは私もよく存じてございますゆえ、陽太朗と兄ぃやの仕業でしょう。図鑑を眺めるうちに意思疎通した二人は陽太朗が採集係、兄ぃやが標本係と手分けして図鑑の情報に書き足していったのではないかと思われます。陽太朗はページを捲り、押した葉を指で弄びながら、何やら小さな声でぼそぼそと独り言を申しておりました。あまりに小声だったせいか私にはその言葉を理解することができませんでした。

　私はと言えば、兄ぃやを悲しみ悼む気持ちがないではございません。小さな兵隊様は私の家で確かにいたのです。私と陽太郎の二人だけの秘密ではありましたがまぎれもない事実だったのです。でも、だとしたならば、兄ぃやはなんのためにあの藪で震えていたのでしょう。家の庭の植物を集めメモを取り図鑑を眺めていたのでしょう。私にはこのことが兄ぃやとお別れになったという悲しみ以上の何か大きな意味があるように思えてしかたがないのでございます。ただ今となってはこれもすべて私の勝手な憶測に過ぎず、町の誰に

申しましてもきっと私の疲れによる幻と気の毒がられるばかりでございましょう。
真平様もどうかご無理なさいませんよう、島の方を見習って適度に怠けながらお体を大切になさってくださいませ。

チヅ

チヅ殿

そちらは、そろそろ梅雨に入る頃でしょうか。こちらはもう三日も何もできずにただ設営所におります。「風」のせいです。

上天気であったこの島も、時折強い風が吹き嵐のようになるのです。我々の到着した日もそうであったかと思われます。しかも今回の風は特に巨大なもので、このようなものは数十年前に一度あっただとか、いやその時もかように強くはなかっただとかいう島の人々の話から、今回の天候が異常なものだというのがわかりました。私はこの天候の中、荒れる畑や戦局の心配よりも樹の上の人々が気がかりでおります。

そうして当然のことながら、この天候では満足な訓練もできず皆の気持ちも徐々にささくれ立ち、我々は敵国にも無視をされ続けている。このような辱めを受けてなお、ただ穀つぶしに無為な毎日を送るなど耐えられない。このまま黴びて腐り死んでしまうと言ってはあちこちで衝突を始めるようになりました。

私はといえば、ただ部屋で考えているのです。無為に生きることが衝突を生む我々と、

長く生きるために、できるだけ無為な生活をしようとしているこの島の人々は、生き物としての根本が違うのではないか。我々がもし、なんらかの方法でこの島の人々のような命の使い方を学んだとして、果たして同じように生きていかれるのだろうかと、風が響く屋根の下、悶々としているのです。

今朝、強い風の吹き始めた中、鼻の欠けた男が私を訪ねてまいりました。男は、設営の屋根を張る布を少し貸してほしいと話すのですが、軍のものという規定云々を差し置いても、厳しい戦局で老朽激しく現在使っている分で我々も不足であるため貸与してやりたいが難しいと伝えたところ、男の心配事は樹の上の人々のようで、このような強い風はかつてないほどだから、かなりの数の体が吹き飛ばされ海へ落ち使い物にならなくなるだろうと言うのです。なら樹から降ろして屋根のある場所へ入れればいい、と言いましてもあの樹の高さと葉や幹の成分が関係しているので祭りの時以外は降ろすことができないということで、やはり私たちには計り知れない多くの自然科学的な根拠があるのだろうと納得し、では何か他に策はないかとたずねたところ、男は残念そうに首を振り、風は残酷で不便だがこの島以上の場所が今のところ見当たらないのだと言うのです。

出て行こうとする彼に、ふと私は気になって訊きました。あなたがたはそうして長く生きて、いったいぜんたいどうするのかと。彼はまだ若いように見えたのですが、きっと既に長いことこの島に生きているのでしょう。私たちはテーブルに向かい合って座り、彼は

小さな紙に図を書いて説明をしてくれました。
　彼らは、どうやらどこかからどこかへ移動している最中のようなのです。その地点がどれだけ離れているのか、また、どのくらいの時間をかけて移動しているのか、それは彼ら自身にもわからぬようなのです。ただ、とても、長い時間がかかるということだけを理解している、と彼は言いました。彼らが体を再利用するのも、疲れず無理をせず、私たちから見れば無為なように過ごしているのも、最低限の労力で作物が取れるこの島の仕組みも、何か果てしのない航海に、私たちのような余所（よそ）者がこの大風に運ばれて漂流してきてしまったようなことなのかもしれません。鼻の欠けた男は、ならない鼻歌をならしながら帰ってゆきました。
　日が暮れるころになって、天幕の隙間から覗く空を、小さく虫のように飛んでいく島の人の体が幾つか見えました。大事にすることも無駄にすることもできる命が、それとは別に本当に簡単な、ごくどうでも良いことで無くなるのだと思い知りました。
あなた方も、どうか気をつけるように。元気な姿で会いましょう。
真平

真平様
　そちらも雨が多うございますか。こちらも傘を持ち歩く日々でございます。
私、気がついてしまったのでございます。真平様と私の関係を。夫婦、という人間社会

での関係のことではございません、あなたの耕す南の島の土と、私の立ちつくす庭先の関係といってもよいかもしれません。
　夕べ、陽太朗があなたのことや兄ぃやのことを思い出したのか、切ながってべそをかきましたので、
「大丈夫、お父様は同じお空の下で元気に頑張っておられますよ。じきに会えます」
　と言ってあやしました。すると陽太朗は、
「では兄ぃやは」
　と聞いてきましたものですから兄ぃやはお空の上に、と言いかけてはっといたしました。地続きであろうとなかろうと、同じ空の下にいることはできる、人はお空の上にいても同じ空の下であるのに変わりはないと思ったのでございます。
　ひょっとしたらあなたも、お空の上にいらっしゃるのではございませんか？
　私は今まであなたは同じ空の下、地続きのずっとずっと遠い異国の南島においでであると思っておりました。だのに手紙のやり取りはまるですぐそばに、いいえ寧ろ同じところに立っているかのように同じ時が流れているのが不思議でなりませんでした。
　しかしたとえばどうでしょうか、空の反対側、同じ空を挟んで向こう側にあなたの耕す大地があるのだとしたら。天気や時の流れは全く同じの空の下、いいえ私から見ましたらあなたの大地は空の上、あなたから見ましたら私のいる場所は空の遥か上となるのでござ

います。荒唐無稽な妄想とお笑いになられるでしょうか。私も自分の思いつきがあまりにも突飛なためどう陽太朗に説明してよいか困惑いたしております。どうやってあなたがたお国の隊が空の向こうの大地に着いたのか。私の頭では全く考えも及ばないのでございます。ただこのお手紙がどうやって我が家の郵便受けに到着するのか。それはきっとあなたの頭上を行きかう飛行機、お腹と背中をあべこべにして飛んでいると仰っていた戦闘機が、私のおりますこちらへ向かって投下するもの。

そうですとも、きっとあの、盛んに刷り紙を撒くあの飛行機なのでございます。灰色の雲の上、あなたのいる太陽の眩しいそちら側の空から、刷り紙とともに私にあなたからのお手紙を飛行機が落として寄越しているのだと、本日私は確信いたしたのでございます。あなたは空襲などされませんとも。無論、私たちもです。あなたと私の頭上を行きかう飛行機の中には、紙っきればかりがパンパンに詰まっているのですから。言葉の刷られた紙切れは、空のあちらとこちらを繋ぐために、私どものいる町へ撒かれるのでございます。そこに混ざっていらっしゃるのが、あなたのお手紙なのです。

きっとあなたは私が極限の毎日に心が破裂してしまったとお嘆きになるでしょう。このような邪想に縋らねば毎日、この大地を踏みしめ陽太朗の手をひいて生きていくことができなくなったと、私の弱さを落胆なさるでしょう。それでも私の確信は揺るぐことがないのです。

また、きっと一緒に暮らすことができます。それまでどうか、どうかお元気で。

チヅ

（了）